The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「自分」の付加詞用法に関する一考察 ： 「自分から」を例に
Author(s)	小薬, 哲哉
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69951
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「自分」の付加詞用法に関する一考察 —「自分から」を例に—*

小薬　哲哉

1. はじめに

日本語の「自分」は文法研究の重要なトピックとして多くの論考が積み重ねられてきた。その多くは先行詞が同節内に存在しない、いわゆる長距離束縛の「自分」に注目したものである（最近の研究として、例えば西垣内 2014, Nishigauchi 2014 などがある）。先行詞が同節内にある再帰用法に関しても、動詞の項 (argument) である事例、特に直接目的語の事例が考察の中心であった。

その一方で、Hirose (2014) が挙げる「自分で」のように、行為主体の意志性を表す副詞的な用法も存在する。しかし、こうした付加詞 (adjunct) としての振舞いを示す「自分」を取り上げた研究は、管見の限り少数に限られ、さらなる研究が必要である。

本稿では、付加詞的な「自分」の別の事例として、「自分から」を取り上げ、その振舞いを考察する。次節以降で、先行研究を瞥見した後、その振舞いをコーパス調査に基づいて考察し、「自分から」が実際の言語環境でどのように用いられているのかを明らかにする。

2. 先行研究

本節では、「自分」「カラ格」「自分から」のそれぞれに関する先行研究を概観する。

2.1. 「自分」の諸用法

まず、「自分」に見られる諸用法についておさえておきたい。再帰代名詞「自分」には、(1a) の再帰用法、(1b) の視点用法、(1c) の話者指示用法があり、それぞれ異なる振舞いを示すことが知られる (廣瀬 1997, 2005, Hirose 2002, 2014, 小薬 2017; cf. 久野 1978)。

(1) a. 太郎$_i$は自分$_i$を批判した。
　　b. 太郎$_i$は自分$_i$が友達から借りた本をなくした。
　　c. 太郎$_i$は自分$_i$は天才だと{言っている / 思っている}。

再帰用法とは (1a) のように先行詞が同節内にある場合で、特に先行詞と「自分」が同じ述語要素となる用法である。再帰用法の「自分」は、行為者の行う行為が他の事物に影響を与えるのではなく、行為者自身に及ぶという行為の再帰性を表す。しかし、2.3 節で見るように、先行詞が同節内にある「自分から」は厳密にはこの意味的規定を満たさない。本稿では,「先行詞が同じ名詞句内および同節内に存在する」という構造的規定に基づいて「再帰用法」という名称を用いる。

視点用法の「自分」は、(1b) のように「自分」が連体修飾要素として名詞句内に埋め込まれているもの、あるいは「～時」「～ので」節のように副詞的従属節内の要素として生起するものをいう。つまり、「自分」の先行詞が節の境界を越えた構造内に存在する。この用法

* 本稿は、科学研究費助成事業（若手研究（B））（17K13446）による研究成果の一部である。

では、「自分」は「それを含む節が記述する出来事をその指示対象である人の視点から話し手が記述することを表す」とされる (廣瀬 2005:39)。

最後に、話者指示用法は、発話・思考・意識を表す述語の補文内に現れる用法である。[1] この用法の「自分」は、久野 (1978) が指摘するように、補文が表す発言や思考の発話者を指す。このため、廣瀬 (1997) を始めとする一連の研究では、この用法で「自分」が指示する対象を「私的自己 (private self)」と呼んでいる。内的思考という「私的」な領域における自己という意味合いである。

再帰・視点・話者指示という三つの用法を区別する上で重要な特徴の一つに、「自分」を人称代名詞で置き換えられるかどうかが挙げられる (廣瀬 1997; Oshima 2004 も参照)。視点用法の「自分」は、「彼」のような人称代名詞と置き換え可能だが、再帰用法と話者指示用法は置き換えができない。

(2) a.* 太郎$_i$は彼$_i$を批判した。
　　b. 太郎$_i$は彼$_i$が友達から借りた本をなくした。
　　c. ??太郎$_i$は彼$_i$が天才だと{言っている / 思っている}。

以上の三用法の他に、一人称・二人称代名詞としての用法もある (廣瀬 1997:19-20)。

(3) a. 自分がやりました。
　　b. 自分はどう思うの？（特に関西の方言で）

(3a) では「自分」は話し手を、(3b) では聞き手を指す。このような用法は、廣瀬 (1997) が指摘するように、先行詞となる名詞句が言語的文脈に生起せず、使用域 (register) が限定的である（(a) は軍隊や運動部などの規律だった集団での男性の発言を喚起し、(b) は関西方言に特徴的)。これらの点から、上述の三用法とは独立したものと捉えるべきである。本稿では、この用法を指示詞の用法になぞらえ、「現場指示 (deictic)」用法と呼ぶことにする。

以上の分類は、「自分」がどのような構造あるいは言語的環境で生起するかに基づいたものである。[2]「自分」の用法を分類する上で重要となる別の観点として、指示対象の解釈に基づく分類がある。上で見た再帰・視点・話者指示用法の例は、いずれも先行詞が表す人物そのものを指す。これに対して、先行詞とは異なるあるいは指示対象が不明の場合もある。そのような解釈として、(4a) の近似 (proxy) 解釈 (cf. Jackendoff 1992) と (4b) の任意 (arbitrary) 解釈 (cf. Huang 2000:91) の存在が指摘されている (Oshima 2004:5-6, fn.3)。

(4) a. 太郎は過去の自分と決別した。/ 花子は本当の自分を取り戻した。

---

[1] 但し、自由描出話法のように先行文脈から話し手（語り手）の意識の描写であることが分かる文脈においては、これらの述語がなくとも話者指示的「自分」を使うことができる。
(i) 太郎は昨日のことを思い出していた。自分があんなことを言ったせいで。

[2] 先行研究では、この他に次のような対比・強調用法 (廣瀬 1997:20) の存在も指摘されている。
(i) 太郎は相手にばかり発言させるが、<u>自分は</u>全く発言しない。
この例では、「自分」の先行詞が前文に生起しているが、再帰・視点・話者指示用法のいずれの環境にもあてはまらない。加えて、(ii) のように「自分」と対比される要素が存在することで、はじめて認可される。
(ii) * 太郎は、自分は全く発言しない。
これは、一見すると再帰・視点・話者指示のいずれの構造にも当てはまらないように思われるが、(iii) に示すように人称代名詞による置き換えが可能であることから、視点用法の一種と考えられる。
(iii) 太郎は相手にばかり発言させるが、彼 (自身) は全く発言しない。

b.　自分を愛することは大切なことだ。

(4a) の「自分」は構造的には再帰用法に分類されるが、それが指す内容は「太郎の過去の記憶・イメージ」や「花子の感情・振舞い・イメージ」など、先行詞に近似した実体を表している。(4b) も再帰用法の構造であるが、先行詞が存在せず、任意の人物を指す解釈となる。

以上の議論から分かるように、再帰代名詞「自分」には多様な用法・解釈が存在する。

2.2. カラが表す意味

格助詞カラについては、日本語学の分野で様々な記述がなされている。荒 (1975)、森田・松木 (1989)、グループ・ジャマシイ (1998)、日本語記述文法研究会 (2009)、日本語文法学会 (2014) などがある。例えば、日本語記述文法研究会 (2009: 37-38, 64-67) では、起点を表すカラの意味について、(i) 移動の起点、(ii) 方向の起点、(iii) 範囲の始点、(iv) 変化前の状態、(v) 動きの起点（動きの主体）を挙げている。

(5)　a.　子どもたちが教室<u>から</u>でてきた。

b.　ここ<u>から</u>富士山がよく見える。

c.　朝<u>から</u>晩まで仕事をする。

d.　信号が青<u>から</u>黄色に代わる。

e.　その荷物は私<u>から</u>田中くんに渡しておきます。

また、順序集合の先頭要素を標示する用法もある (日本語文法学会 2014:126)。[3]

(6)　a.　その本<u>から</u>読んだ。

b.　受験生のうち 1 番<u>から</u> 5 番までを面接室に入れた。

2.3.「自分から」の先行研究

多くの先行研究では「自分から」は周辺的事例として考察の対象から外されてきた。以下では、「自分から」に言及している研究について概観する。Oshima (2004:5-6) や Kishida (2011) は、「自分から」を「自分で」と並んで主語の意志性 (volitionality) を表すイディオムであると分析する (cf. Hirose 2014:107, fn17)。その証拠として、Kishida (2011: 35-36, 39) は以下のような例文の容認性の差を挙げている。

(7)　a.　ジョンが自分からそこへ行った。

b. * 木が自分から倒れた。

(8)　a.　ジョンが自分で壁を塗った。

b. * 木が自分で倒れた。

「木」は意志をもたない実体であり、「自分から」「自分で」が共起できないことから、これらが意志性を表すことが分かる。また、Kishida (2011) は「自分から」について「自分」が「自分自身」と交替できないこと、そして「自分から」と主語の意志性を表す副詞「自ら」

[3] この他に、原因の用法（例：憎しみ<u>から</u>人を殺す）、理由・根拠の用法（例：状況<u>から</u>判断する）や接続助詞の用法（例：今日は雨が降っている<u>から</u>歩いていこう）もあるが、これらは人称代名詞に直接後続しない。人称代名詞である「自分」にも関与しないため、本稿ではこれ以上扱わない。

とが交替可能なことを指摘している (Hirose 2014:113 も参照)。

(9) a. * ジョンが自分自身からそこへ行った。 (Kishida 2011:58)

b. ジョンが自らそこへ行った。

ここで明確にしておきたいのは、(7a) の「自分」は再帰用法に分類されるということである。2.1 節でも触れたように、「自分から」を伴う文が表す出来事は、「行為者の行う行為が他の事物に影響を与えるのではなく、行為者自身に及ぶ」という典型的な再帰性の定義から逸脱する。ここでの「自分」は行為が発生する源、2.2 節で言うところの「動きの起点」を表し、行為が行為者自身に及ぶことは表していない。このような意味的規定を踏まえると、(7a) のような「自分から」は再帰用法ではないと思われるかもしれない。しかしながら、先行詞が同節内にあること、さらに「彼」のような人称代名詞で置き換えができないという統語的振舞いを考えると、再帰用法であるとする方が妥当である。

(10) * ジョン$_i$ が彼$_i$ からそこへ行った。

再帰用法であるなら、「自分から」は先行詞と同節内の述語動詞と意味的な関係を構築することになる。従って、先行研究が指摘するように、「自分から」が意志性の副詞として動詞を修飾する働きをもつのは当然のことだと言えよう。

2.4. 問題の所在

ここまで見てきたように、「自分から」は他の格助詞の場合と比べ、先行研究でほとんど分析されてこなかった表現である。「自分から」がどのような振舞いを示すのか、特に再帰用法以外の振舞いを示すのかどうかを検証する必要がある。次節では、「自分から」が実際にどのように使用されているのか、大規模コーパスを用いてその実態を明らかにする。特に、先行研究が指摘する主体の意志性を表す用法以外の用例が存在するかどうか、明らかにしたい。

3. 分析

3.1. 分析方法

「自分から」がどのような意味で使われているか、コーパス調査を行う。分析資料として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese、以下 BCCWJ) を使用した。分析方法として、「中納言」1.1.0 を使用し、「自分」および「じぶん」をキーとして短単位検索を行った。

3. 2. 「自分から」の用法と用例数

「自分/じぶんから」の用例は、合計 1380 例見つかった。内訳は、「自分から」が 1374 例、「じぶんから」が 6 例であった。見つかった用例がどの用法、解釈に該当するか、それぞれ目視で検討し、その構造的位置と意味機能に基づいて分類した。具体的な分類基準として、2.1 節で述べた (i) 先行詞との構造的位置関係と (ii) 人称代名詞による置き換え可能性を

用いた。これらに基づき、再帰・視点・話者指示用法のいずれかに分類した。また、「自分」の指示対象が一人称あるいは二人称かどうかという基準から現場指示用法かどうかを確認した。各用法の件数と割合を表 1 に示す。

再帰	1271 例　(92.1%)
視点	101 例　(7.32%)
話者指示	7 例　(0.51%)
現場指示	1 例　(0.07%)

表 1　BCCWJ における「自分から」の用例数と割合

表 1 から、再帰用法がおよそ 92%と用例の大多数を占めていることが分かる。これは先行研究での内省判断に基づく観察と合致する。だがその一方で、再帰用法以外の用法も確認された。以下では、それぞれの用例を考察し、「自分から」がもつ意味機能の実態に迫る。

3.2.1.「自分から」の視点用法

まず、視点用法の「自分から」の事例を見てみよう。視点用法と分類される事例は 101 例見つかった。これは全体の約 7%にあたる。次の二つの例では、「自分から」が生起しているが、いずれも先行詞となる名詞句が同節内に生起していない。[4]

(11) 一時間後、ベロストル通りに面したマイク・カールソンの部屋で、唇の傷口にタオルを押し当て、ブルーノは自分からエルザを奪ったアメリカ人が一方的に喋り続けるのを、黙秘権を行使した犯罪者のように黙って聞き続けた。　(BCCWJ, LBc9_00022)

(12) [吝子は] 結婚生活が充実しているということとは別に、自分から仕事がなくなって、どこに生きがいを見つければいいのかとまどっているのだ。　(BCCWJ, LBo9_00229)

(11) では、「自分から」が連体修飾節内に埋め込まれており、先行詞は主節主語「ブルーノ」である。(12) の「自分から」はテ形従属節（「仕事がなくなって」）内に生起し、省略された主節主語「吝子」が先行詞となっている。[5]

どちらの例も、「自分から」が主語名詞句の意志性を表していない。実際、「自ら」や意志性を表す副詞「わざと」「意図的に」で置き換えると原文の文意が大きく損なわれる。

(13) ＃　ブルーノは {自ら/わざと} エルザを奪ったアメリカ人が一方的に喋り続ける…

(14) ＃　吝子は {自ら/意図的に} 仕事がなくなって…

(11)(12) では「自分から」が＜移動の起点＞を表している。すなわち、「自分」という場所から「エルザ」や「仕事」が移動し、存在しなくなる。ここでいう移動とは、始点と終点があるような空間的移動だけではない。以下の例のように、「ある場所からモノやコトが出現・

[4] 以下、BCCWJ から引用した例に関して施した強調は、筆者のものとする。

[5] もしこれが主節に生起しているとすれば次の文は容認可能と予測されるが、事実はそうではない。このことからも、(12) の「自分から」は先行詞と節境界をまたいだ関係にある。それゆえ、視点用法だと分かる。

(i)　＊　吝子は自分から仕事がなくなった。

発生する、出てくる」という出来事も含まれる。

(15) 寝たきり状態から車いすに乗せ、座らせることで、表情は生き生きとして豊かになり、それまでほとんどみられなかった周囲への関心、話しかけに対する応答や、自分からの発言が増加しました。 (BCCWJ, PB41_00004)

出来事名詞「発言」が表す事象は、話し手から聞き手への二地点間の移動という側面だけでなく、話し手による発言の創出という「作成事象」としての解釈もある。このため、「自分」は「発言」という事象が発生する源と見なされる。この意味において、当該事例は＜移動の起点＞でありながら＜出来事の起点＞としての役割も担っていると解釈できるだろう。

以上のような＜移動の起点＞を表す用例の他にあと二つ、注目すべき用例が観察される。一つは、＜方向の起点＞を表す場合である。(16)(17) の例では、「自分から」が話し手の空間的な知覚経験の基準点を表している。すなわち、話し手あるいは語り手が、知覚経験を通して「遠い」「見えない」という評価を下すための直示中心 (deictic center) を示しているのである。

(16) 綴喜は拳銃を構えている金髪の存在だけ、徹底してマークし始めた。その銃口が自分から遠くなるのを待つ。 (BCCWJ, LBh9_00184)

(17) そんな新人時代、自分からは見えない不特定多数の方たちに放送で何かを言うことは、吟味を重ね、本当に発言してもかまわないと確認が取れたものだけであると教え込まれた。 (BCCWJ, PN5a_00027)

＜方向の起点＞に関連して、＜判断の起点＞の意味機能をもつ「自分から」も存在する。この場合、「自分から」の意味は「空間的基準点」から「主体の判断基準」へと意味拡張している。

(18) じぶんの兄弟の子どもは、自分からみると「甥、姪」ですが、自分のいとこの子供の場合は何と呼ぶんですか？ (BCCWJ, OC08_05796)

(19) あなたは夢の中ではどんな行動を起こしていましたか。普段の自分からは考えられないようなことをして、とまどっている人も多いのではありませんか。 (BCCWJ, OB4X_00282)

(18) の「みる」は話し手による直接的な知覚経験を表しているのではなく、話し手の立場から認識・評価する行為を表す。この時「自分」は空間的な起点ではなく、主体の認識における基準点を指している。その基準から「甥、姪である」という認識・評価がくだされるのである。(19) においては、「普段の自分」は、主体の指示対象の時間的に限定された局面を指す近似解釈となる。この局面が基準点となり、それに基づいて「考えられない」という評価が与えられている。このように、(18)(19) の「自分から」は主体が何らかの判断を下すための起点を明示する機能を担っている。

以上、視点用法の「自分から」を観察し、＜移動の起点＞、＜方向の起点＞、＜判断の起点＞を表すことを見た。いずれの事例も先行研究での見解に反して、主体の意志性を表していない。ここで、「視点用法であれば主体の意志性を表さない」という一般化が成り立つよ

うに思われるかもしれない。しかし実際には、視点用法でも意志性を表す事例が存在する。

(20) 年金制度はなかなか複雑だが、利用可能な情報源に自分からアプローチしていく積極性も大切だ。 (BCCWJ, PN4j_00017)

この例の「自分から」は、「積極性」を修飾する連体節に埋め込まれているが、「自ら」と置き換えることができる（「自らアプローチしていく積極性も大切だ」）。このため、視点用法の「自分から」であっても主体の意志性を表すということになる。つまり、視点用法であることは、主体の意志性を表す副詞的機能をもたないことと厳密には対応していないのである。このことは、次に見る話者指示用法と現場指示用法の用例からも同様に裏付けられる。

3.2.2. 「自分から」の話者指示用法・現場指示用法

BCCWJ で観察された話者指示用法は、全体で 7 例と少数にとどまった。これは用例全体の 1%に満たない件数である。例えば、(21)(22) は＜移動の起点＞を、(23) では＜方向の起点＞を表す話者指示用法の例である。

(21) 「夫がピストルをそばに置き、自分から去っていったら殺すと言えば、妻はそばにいるしかないでしょう？… (BCCWJ, LBs9_00144)

(22) 「旬平さんはたぶん自分を担保に愛人からお金をひきだしたことで通子さんの愛はもう完全に自分から冷めたと思ったんでしょうね、… (BCCWJ, LBk9_00227)

(23) 政治が自分から遠いところにあってかまわない，と思っている人は少数である。 (BCCWJ, PM31_01047)

一方で、＜判断の起点＞を表す用例は 1 例も見つからなかった。これは、一人の人物の視点から認識・評価という判断をくだすのと同時に、それを当該人物の内的な思考・意識活動として記述するのは、かなり複雑な事態となるためだと考えられる。しかしながら、次の例が示すように、実際には不可能というわけではない。

(24) メアリーは、ジョンは自分から{見ると/すると}かなりの男前だと思った。

現場指示用法に関しては、次の 1 例のみが見つかった。

(25) 途中の名古屋駅にてお友達のダーさんが奥様と共にホームに差し入れを持って来て頂いてくれておりましたので、自分はダーさんからの差し入れを受け取り、ダーさんは自分からの差し入れを受け取りまして… (BCCWJ, OY15_23867)

(25) では「自分から」が「差し入れ」の（所有）移動の起点を表しており、同時に「自分」は話し手を指す一人称代名詞として用いられている。実際ここでの「自分から」は「私から」と交換可能である（「ダーさんは私からの差し入れを受け取りまして…」）。人称代名詞として用いられているので、必然的にこの「自分から」も主体の意志性を表してはいない。

3.2.3. 「自分から」の再帰用法

これまでの議論で、「自分から」に視点・話者指示・現場指示用法が存在すること、それらの多くは主体の意志性を表していないことを見た。最後に、「自分から」の用法で大多数

を占める再帰用法を考察しよう。先行研究での指摘を裏付けるように、主体の意志性を表す副詞的機能を持つ事例が数多く観察された。例えば、次の二つの例では、「自分から」が＜動きの起点＞を表す。すなわち、「話す」「犠牲になる」という行為が主体から開始されたものと解釈される。

(26) 紹介してもらったあとは、自分から話しかけていかないと、そこから先までは、面倒を見てもらえません。 (BCCWJ, LBs1_00048)

(27) カタツムリはおとなしい動物で、じぶんからけんかをしかけるようなことは、けっしてしません。 (BCCWJ, LBan_00016)

再帰用法の「自分から」は、このように主体が意志的に行為を引き起こすことを表すことが多い。実際、(28)(29) のように、他の意志的副詞と共起する事例も目立って観察された。

(28) 夫が妻を犠牲にしているばかりではなく、妻自身が自分から**進んで**犠牲になっているという点である。 (BCCWJ, LBn3_00008)

(29) 文例集を用意し、機会を見て話し掛けてみるよう事前指導をしておいたが、ほとんどの児童が自分から**主体的に**コミュニケーションをとろうと試みていた。 (BCCWJ, PB33_00278)

ここで、「自分から」に先行、後続する意志的副詞をそれぞれ表 2 にまとめておこう。なお、カッコ内の数字は件数である。

「自分から」に先行	わざわざ（2）、あえて（1）、笑顔で（1）、すすんで（1）、しびれを切らして（1）、堂々と（1）、より積極的に（1）、
「自分から」に後続	進んで・すすんで（60）、積極的に（24）、望んで（4）、自発的に（3）、わざわざ（3）、潔く（2）、好んで（2）、率先して（2）、明るく快活に（1）、惜しげもなく（1）、臆することなく（1）、果敢に（1）、強引に（1）、志願して（1）、主体的に（1）、楽しそうに（1）、堂々と（1）、貪欲に（1）、熱心に（1）、能動的に（1）、喜んで（1）、わざと（1）

表 2　「自分から」の前後に共起する意志的副詞

再帰用法の「自分から」は、その多くが主体の意志性を表すが、その一方で、意志性を表さない非意志的用法の例や、無意志的と解釈される例も観察された。まず、(30)(31)は、主体が意志的であるか無意志的であるかが問題とならない用法、いわば非意志的用法である。

(30) だれもが自分から軍隊色を消したがっている。 (BCCWJ, PB23_00376)

(31) 自分から発光するのではなく，ほかからの光や粒子（紫外線，X線，陰極線など）の照射によって発光する光を蛍光という。 (BCCWJ, OT23_00018)

(30) では、「軍隊色」が「自分」という場所に存在し、そこから「消失する」という、＜移動の起点＞としての役割を「自分から」が表している。この＜移動の起点＞を表す用例は、3.2.1 節の視点用法と 3.2.2 節の話者指示用法で観察されたものと同様で、主体の意志性が問題にならない。(31) はさらに興味深い。この例の「自分から」は「発光する」という＜動きの起点＞を表している。しかし、その動きの主体は文脈上省略された「物体」であると考え

られ、従って意志的存在ではあり得ない。これも非意志的に用いられている例である。

次に、無意志的用法を見てみよう。(32)(33) では、太字で示した表現が注目に値する。

(32) ただ一度だけ、**何かの拍子に**レイ子が自分から “以前の男” について**ふともらし**たことがある。 (BCCWJ, OB1X_00182)

(33) そうなると目々澤さんの冷たい態度がたまらなく不安で、**思わず**自分から**電話しちゃう**んです。 (BCCWJ, PB19_00270)

「何かの拍子に」「ふと」「思わず」のような副詞や「もらす」「てしまう」といった動詞は、当該の行為や事態が主体の意志に反して、あるいは意志とは無関係に生じることを示す。従ってここでの「自分から」は「わざと」や「意図的に」のような意志性の副詞と置き換えることができない。

(34) ＊ 何かの拍子にレイ子がわざと “以前の男” についてふともらしたことがある。

(35) ＊ 思わず意図的に電話しちゃうんです。

以上見たように、再帰用法の「自分から」は、主体の意志性を表す副詞としての用法が中心的なものと考えられるが、その一方で非意志的用法や無意志的・無意識的と解釈される用例も存在することが明らかとなった。このことは先行研究での分析が妥当でないことを示している。また、再帰用法だからといって主体の意志性を明示するとは限らないということも重要な点である。

3.2.4. 「自分から」の意志性はどこから来るのか

「自分から」が必ずしも主体の意志性を表さないとすれば、その意志的解釈はどこから来るのだろうか。この問いに対する説明は、おそらく「自分」の意味機能と「から」が表す意味から、ある程度合成的に導き出すことができるだろう。2.2 節で見たように、格助詞「から」は＜動きの起点＞を表す。すなわち、それに先行する名詞の指示対象を起点として事態が生じることを表す。

一方で、そもそも事態は動作主を起点として生じるのが一般的である。だから、「自分」が動作主項を指す場合、「自分から」で＜動きの起点＞を明示することは、その語彙的意味から自明の情報を改めて明示していることになる。これはグライスの量の公理 (Maxim of Quantity) に反しており、語用論的に余剰な表現となる。語用論的に余剰な表現が容認可能となるためには、その余剰性が妥当とみなされる言語的文脈が必要となる。そのような文脈とは、「事態が他者によってではなく自分から引き起こされる」という他者との対比の文脈であろう。次の例では、「自分（＝A 児)」に対する「発言をさせようとする他者」の存在が語用論的に喚起される。

(36) 普段おとなしく，自分からは進んで発言をすることが少ない A 児は…

(BCCWJ, PB23_00719)

「他者に事態が引き起こされる」ことの対比として「自分がその事態を引き起こす」ことが表されることから、「主体が意志的に事態を引き起こす」という解釈が生じると考えられる。

しかし、ここでの「自分から」は＜動きの起点＞を表すことが本務であり、「主体の意志性」は語用論的な含意に過ぎない。従って、主体が＜動きの起点＞と見なすことさえできれば、(31)のように非意志的な無生物主語の場合も、(32)(33) のように主体にその意志がない場合も、「自分から」が生起できるのである。

まとめると、「自分から」の再帰用法、特に「自分」が動きの主体を指す場合に、＜動きの起点＞が中心的な意味であり、主体の意志性はそこから派生する語用論的含意であって、文脈によってはそれをキャンセルすることができる。このため、再帰用法であっても、非意志的・無意志的な事例が存在し得るのである。

4. 結論

以上、本稿では、「自分から」を取り上げ、先行研究を瞥見した後、その振舞いをコーパス調査に基づいて考察した。本稿での議論から、(i)「自分から」には意志性を表さない用法も存在すること、(ii) 再帰用法であるからといって意志性を表すとは限らないこと、(iii) ＜動きの起点＞が中心的な意味で主体の意志性はキャンセル可能な語用論的含意であることを明らかにした。意志的副詞の用法以外にも多様な役割を担う「自分から」であるが、その振舞いや意味機能同士の関係性をどのように（理論的に）定式化し、説明するかに関しては、別の機会としたい。

参考文献

荒正子 (1975)「から格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会(編) (1983) 所収.

言語学研究会(編) (1983)『日本語文法・連語論(資料編)』, むぎ書房.

グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』, くろしお出版.

廣瀬幸生 (1997)「人を表すことばと照応」廣瀬幸生・加賀信広『指示と照応と否定』2-89, 研究社.

廣瀬幸生 (2005) 「話者指示の領域と視点階層」『文藝言語研究—言語篇』47, 45-67.

Hirose, Yukio (2002) “Viewpoint and the Nature of the Japanese Reflexive *Zibun*,” *Cognitive Linguistics* 13, 357-401.

Hirose, Yukio (2014) “The Conceptual Basis for Reflexive Constructions in Japanese,” *Journal of Pragmatics* 68, 99-116.

Huang, Yan (2000) *Anaphora: A Cross-Linguistic Study,* Oxford University Press.

Jackendoff, Ray (1992) “Mme. Tussaud Meets the Binding Theory,” *Natural Language and Linguistic Theory* 10, 1-31.

Kishida, Maki (2011) *Reflexives in Japanese*, PhD diss., University of Maryland.

小薬哲哉 (2017) 「再帰用法の「自分」と述語の意味制約」『言語文化共同研究プロジェクト—認知・機能言語学研究（2）』, 1-10.

久野暲 (1978)『談話の文法』, 大修館書店.

森田良・松木正 (1989)『日本語表現文型 : 用例中心・複合辞の意味と用法』, アルク.

日本語記述文法研究会(編) (2009) 『現代日本語文法2 第3部 格　第4部 構文』, くろしお出版.

日本語文法学会(編) (2014)『日本語文法事典』, 大修館書店.

西垣内泰介 (2014)「エンパシーと阻止効果—「自分」の束縛と「視点投射」—」『言語研究』146, 109-133.

Nishigauchi, Taisuke (2014) “Reflexive Binding: Awareness and Empathy from a Syntactic Point of View,” *Journal of East Asian Linguistics* 23-2, 157–206.

Oshima, David Yoshikazu (2004) “*Zibun* Revisited: Empathy, Logophoricity, and Binding,” *University of Washington Working Papers in Linguistics* 23, 175-190.